掐肉摘草

全

解題　垣内摘草

光平の自序並に刊記によるに、安政六年正月成り、同月、出版したものである。

光平が、自詠一首並に門下九十八人の秀逸各一首、都合九十九首を選び、某御所の歌を巻頭、自詠を巻軸とし、春歌（十九首）、夏歌（十四首）、秋歌（十九首、冬歌（二十三首）、雑歌（二十四首）の五部に分類した撰集で、その奥に「作者姓名」として全九十九人の住所並に姓名を表示してゐる。光平門下の概略が知られる。

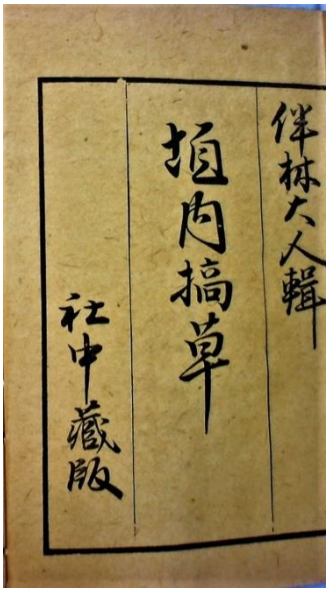
版本の奥に。「垣内摘草　二編　追刻」といふ濠告のあるによれば、次々に編輯出版の豫定であったのであらう。

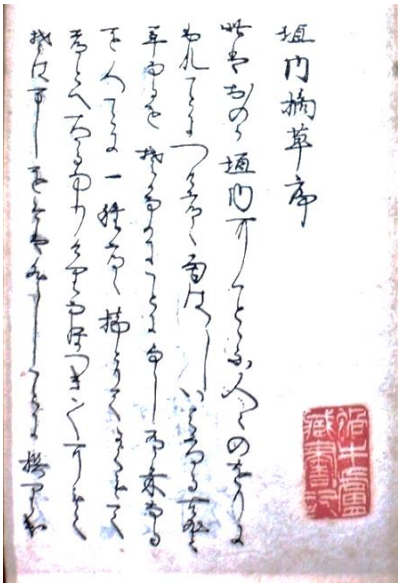
なほ版本は、光平自筆の版下に成り、刊記は次の如くである。

安政六年己未正月
大阪北久太郎町せんたんの本筋西へ入
河内屋清七

底本は、竹柏園所蔵の版本を用ゐた。

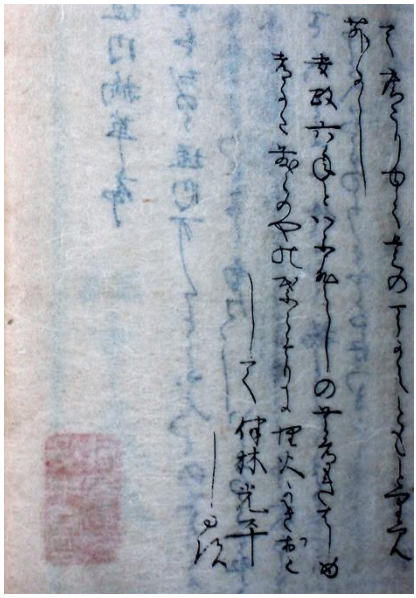
製本書林

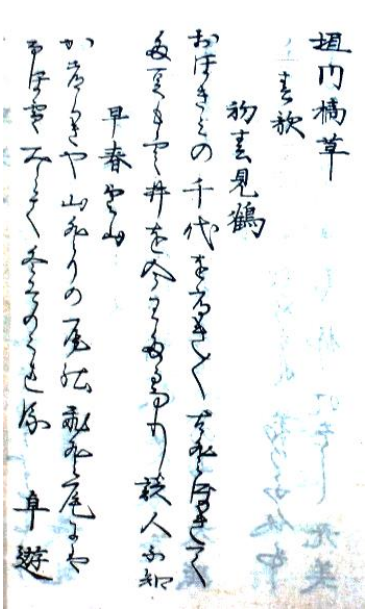




垣内摘草序

此はおのが垣内にことゝふ人々の、折にふれことにつけて句はし出でつる言草なるを、そが中に殊によしありげなるを人ごとに一種づゝ摘とりて、かくもてつどへたるなりけり。なほつぎつぎにもてそはましを、





そは年毎に撰り出て廣ごりゆく道のさかえともとり見むかし。

安政六年といふ年の睦月はじめつかたささのやの葉のこもりに埋火かきおこして　伴林光平記す

垣内摘草

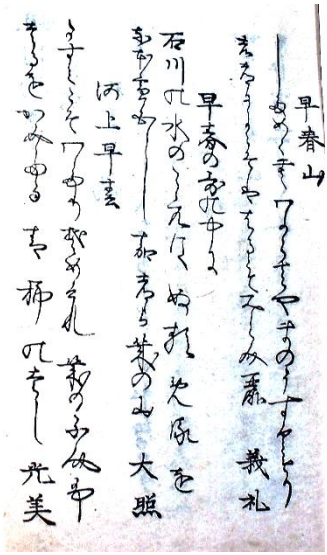
春　歌

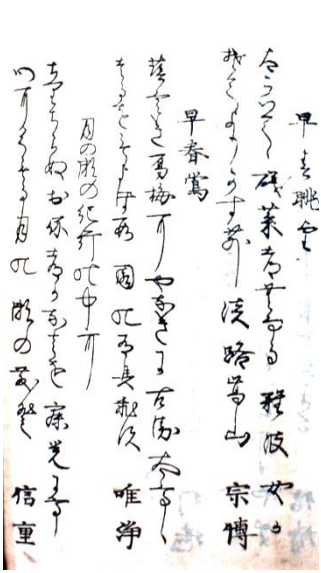
初春見鶴

大君の千代をつぎつぎ壽ぎて
田鶴も雲井を今渡るなり　読人不知

早春雪山

かづらきや山鳥の尾の一尾にはなほ
雪みえて冬ぞ殘れる　卓　遊





早春山

しためぐむ若草山のうすぐもりは
　つかにこそは春も見えけれ　義禮

早春の歌の中に

石川の水のこゝろばぬるめるを
　なほ雪ふらし葛城の山　大照

河上眺望

霞こそわたりそめけれ昨日今日
　春をかけたる青柳のはし　光美

早春眺望

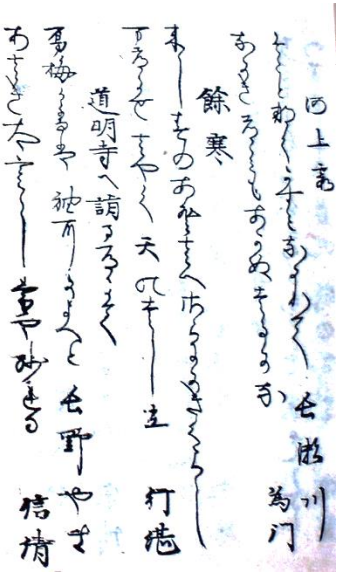
たちいでゝ磯菜つむなる難波女が
　袖よりかすむ淡路島山　宗博

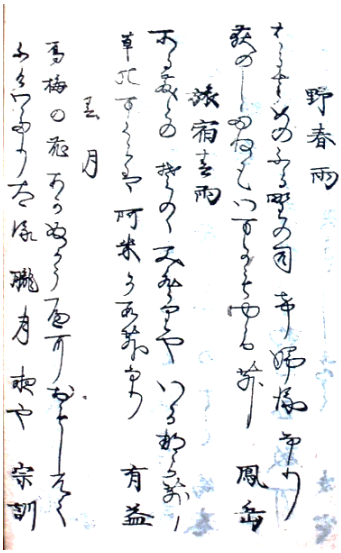
早春　鶯

蔭寒き鳥梅に柳に聲たてて
　春をもよほす園の鶯　唯浮

月の瀬の紀行に中に

ちるちらぬおぼつかなさを寝覺にて
　心にくもる月の瀬の里　信重





河上霞

そことなく霞ながれて長瀬川
　長き堤もあかぬ春かな　　爲門

徐　寒

来し春のあとさへさらにおきくらし
　松風さやぐ天の橋立　　行湛

道明寺へ詣る道にて

鳥梅が香は袖にかよへど長野やま
　あさきみそらに雪や残れる　　信清

野　春　雨

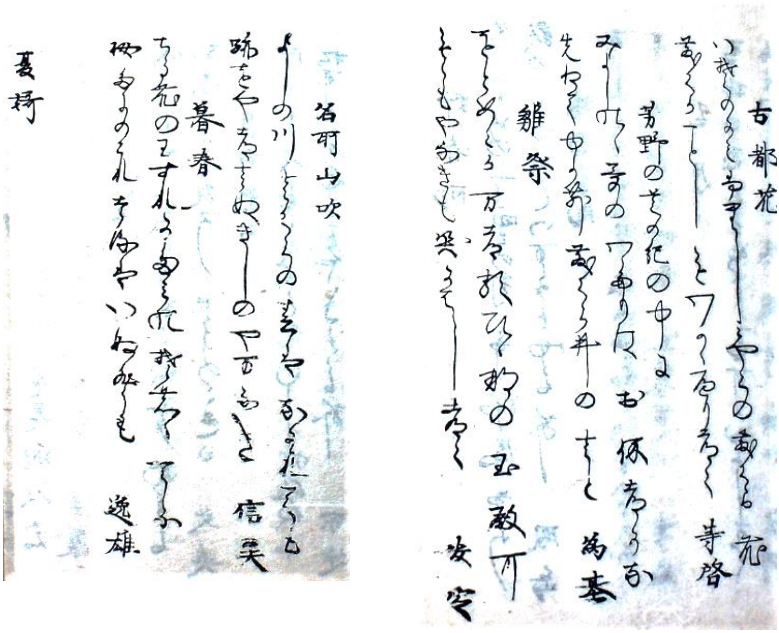
春雨のふる野の司けぶるなり
　荻の下根もいまかもゆらむ　　鳳岳

旅宿春雨

不るさとの園の緑やいかならむ
　草の枕は雨かすむなり　　有益

春　月

鳥梅の花あかぬがうへにおもしろく
　ふけわたりたる腕月夜や　　宗訓



古都花

いそのかみふりし都の櫻花さくか
今年をわが庭にして　等啓

芳野の道の紀の中に

みよし野の夢のわたりはおぼつかな
先ねてゆかむ櫻井の里　爲基

雛　祭

をとめごが祭るひゝなの玉殿に
桃も柳も笑み交しつゝ　安定

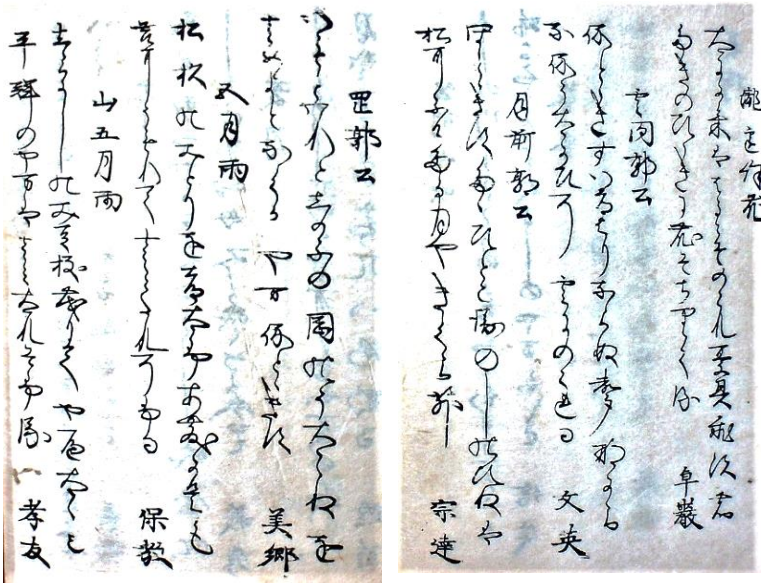
名所山吹

よしの川櫻の春や流れても
跡を宿さぬ岸の山吹　信美

暮　春

散る花の忘れ形見の園の蝶汝だに
殘れ春はいぬとも　逸雄

夏　歌



瀧連作花

谷かげは春こそ残れ鶯の
　瀧の饗に花ぞ散りくる　　卓巖

雲間郭公

郭公いつはりならぬ聲ながら
　なほうたがひは雲に残れる　　文英

月前郭公

郭公たゞ一聲のしのび音は
　松にふけたる月や聞くらむ　　宗達

岡郭公

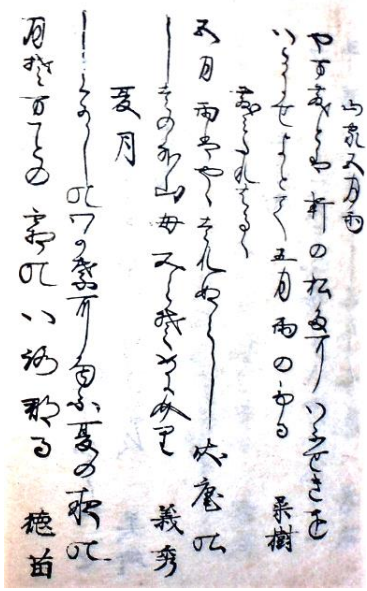
いもとわれとしのぶの岡のうたゝねを
　さめよと鳴くか山郭公　　美郷

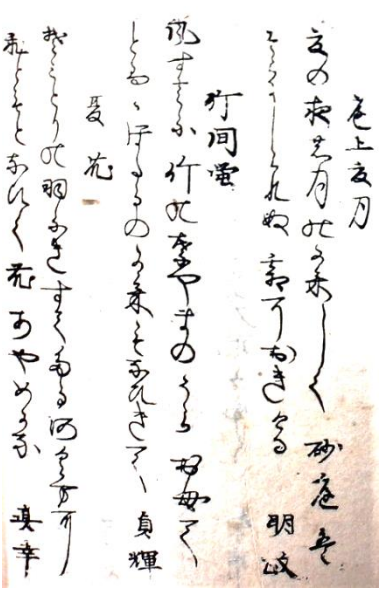
五月雨

松杉の緑を傳ふ朝風も
　苔に埋れて五月雨ぞ降る　　保教

山五月雨

しらかしのみづ枝茂りて八重だゝみ
　平群の山は五月雨ぞ降る　　孝友





山家五月雨

山里は軒の松だにいぶせきを
　いかにせよとて五月雨の降る　桑樹

五月雨晴

五月雨はやゝ晴れぬらし伏庵の
　柴の外山も見えそめにけり　義秀

夏　月

かしの若葉に匂ふ夏の夜の月ぞ
　まことの霜の色なる　徳苗

庭上夏月

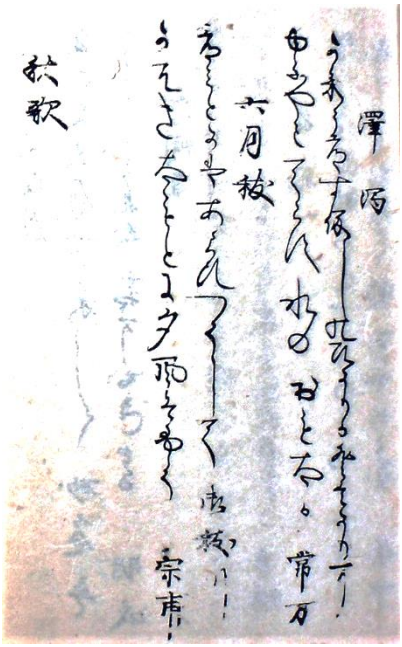
夏の夜の月の影して砂庭は
　空にしられぬ霜ぞ置きける　明政

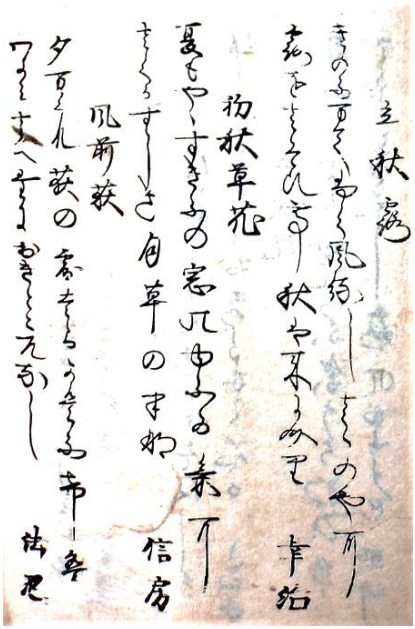
竹間螢

風すさぶ竹の葉山の裏表
　遠く螢の影ぞ靡きて　貞輝

夏　花

そみ鳥の羽ぶきすてたる河隅に
　一本靡く花あやめ哉　眞幸





澤　潟

影うつす星の光かとばかりに
　夕闇照らす水の澤潟　　常方

六月祓

罪とがは洗ひつくして御祓川
　輕き袂に夕風ぞ吹く　　宗甫

秋　歌

立秋露

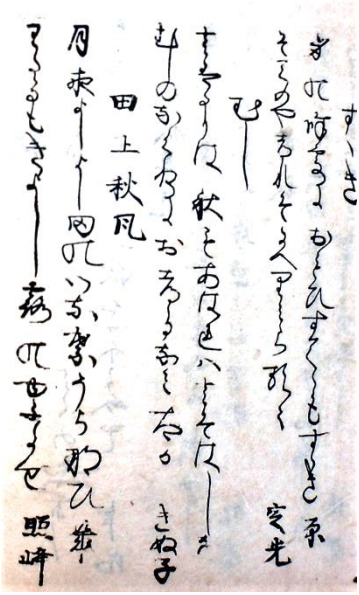
きのふまで吹く風流しさゝのやに
　露を誘ひて秋は來にけり　　幸治

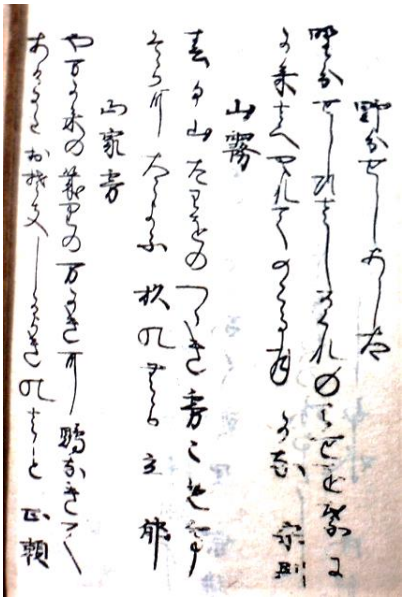
初秋草花

夏もやゝすぎふの窓の夕かげに
　咲くか涼しき月草の花　　信房

風前荻

夕まぐれ荻の露原風吹けば
　我身さへだに置きどころなし　　法忍





薄

身の餘處に思ひ捨てゝも薄原
　袖のやつれぞかへりみらるる　定光

蟲

さばかりは秋もあはれはよそはじな
　蟲の鳴く音に落つる涙か　きぬ子

田上秋風

月夜よしよし田のいな葉うち靡き
　わたるも清し露の夕風　照峰

野分せし朝

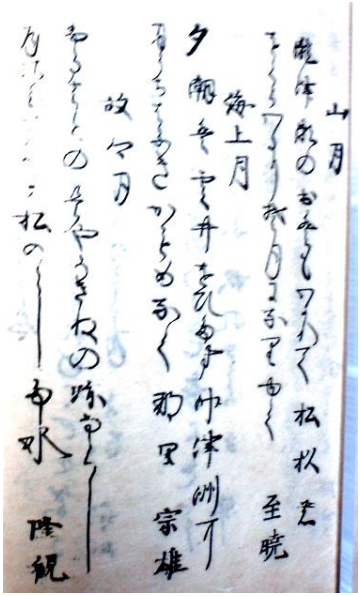
野分せしひさしがくれの芭蕉葉に
　影さへやれて殘る月かな　宗則

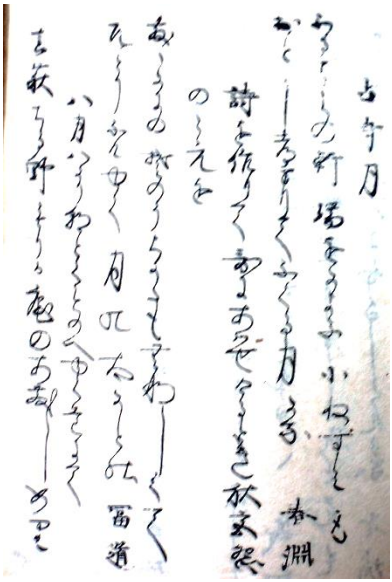
山霧

春日山たわをのつゞき霧こめて
　空に漂ふ松のむら立　郁

山家霧

山かげの霧の籬に鵙鳴きて
　明方おそきしがらきの里　正頼





山　月

瀧つ瀬の音も別れて松杉の
　をぐらわたりぞ月になりゆく　至暁

海上月

夕潮は雲井を浸す沖津洲に
　月うちはぶき鷗鳴くなり　宗雄

故郷月

故郷の是や垣根の跡ならし
　月のみ照らす松の下水　隆觀

古寺月

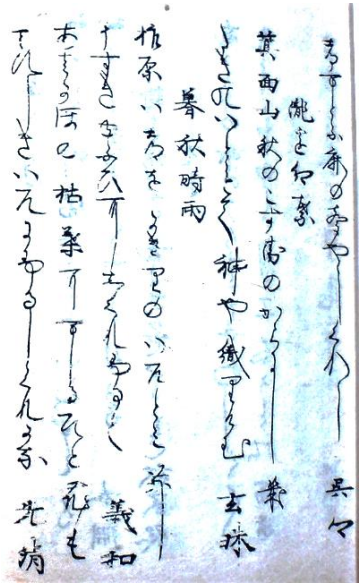
古寺の軒端を通ふ小鼠も
　音しつまりて更くる月かな　春淵

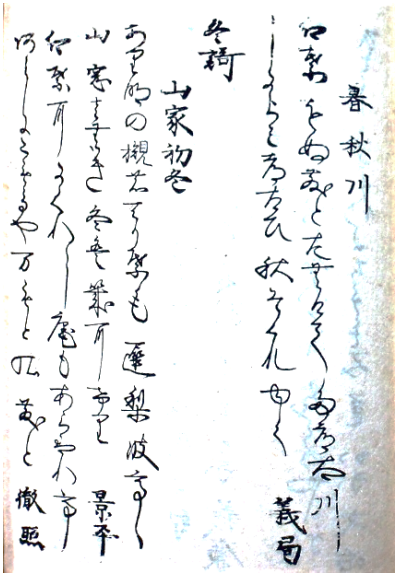
詩を作りて歌に合せる時秋宮怨の心を

さゝがにのその裏にだも空しくて
　ひとり更けゆく月の高殿　富道

八月ばかり朝とく殿へゆく道にて

眞萩散る野守が庵の朝しめり





妻どふ鹿の聲やしぐれし　呉郷

瀧邊紅葉

箕面山秋の梢の唐錦
　瀧の絲もて神や織りけむ　玄珠

暮秋時雨

杵原いつを限りの色と見むうすき夕日に
　時雨降るなり　義和

朝顔の枯葉にまじる一花を
　寂しき色に降る時雨かな　光清

暮秋川

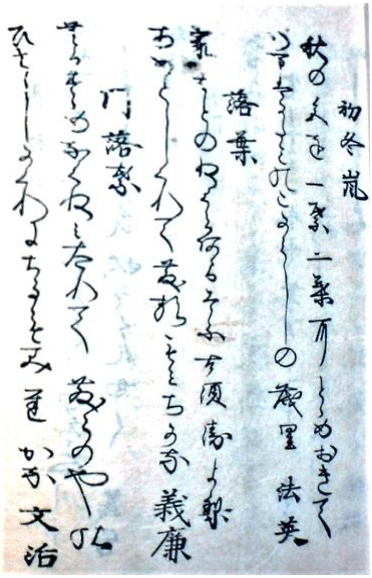
紅葉を幣と手向けて瀧田川
　しがらみ倍ひ秋ぞ暮れゆく　義局

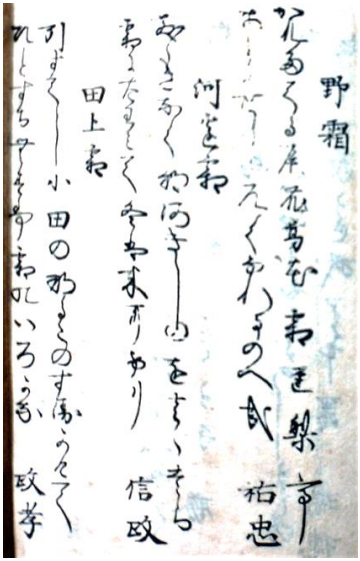
冬　歌

山家初冬

有明の概の照葉も散り果てゝ
　山窓寒き冬は來にけり　景平

紅葉に隠れし庵もあらはれて
　嵐に籠る山本の里　徹照





初冬嵐

秋の色を一葉二葉にとゞめおきて
今はかたみの木枯の森　法英

落　葉

家鳩の塒爭ふ梢より雨としぐれて
散る紅葉かな　義簾

門落葉

群雀鳴く音乱れてさゝのやの
庇隠れに散る紅葉かな　文治

野　霜

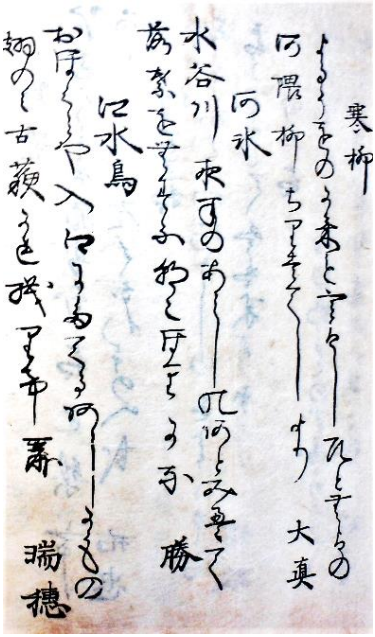
枯れたてる尾花葛花霜ちりて
朝風白くなれる野邊かな　祐忠

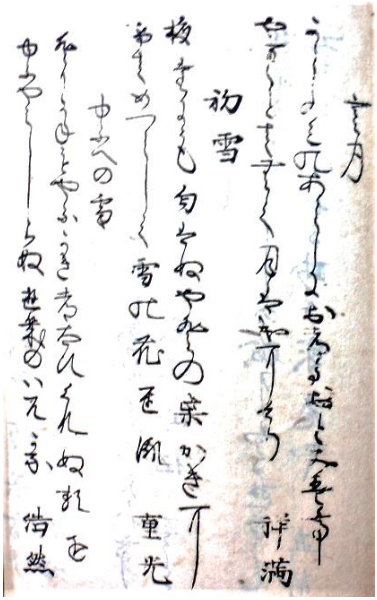
河邊霜

さゞき鳴く朝河岸の小笹原
霜に撓みて冬は來にける　信政

田上霜

引すてし小田の鳴子の末かけて
一筋なすは霜の色かな　政孝





寒　柳

寄る魚のかげも寒けし一叢の
　河隅柳散りすてしより　　大眞

河　水

水谷川夜半の嵐のあと見えて
　落葉を結ぶ朝氷かな　　勝

江水鳥

大倉や入江に立てる葦鴨の
　翅のみこそかれ残りけれ　　瑞穂

寒　月

樫の實の嵐に落つる音みえて
　山窓寒く月は出にけり　　祥満

初　雪

梅だにも匂はぬ宿の柴垣に
　今朝珍しく雪の花散る　　重光

夕　雪

鳥が音も薮垣傳ひ暮れぬるを
　夕闇知らぬ雪の色かな　　浩然

野　雪

分みてし萩の古枝は朽果てゝ
　春日の野邊を雪の花なり　　寛　海

都　雪

世の中の塵の騒ぎも埋もれてゆきにし
　妻が嵯峨の山松　　たかとみ

田家雪

豊かなる年の験に降る雪も
　満ちたらひたる賤が家庭なり　　直　靜

寺　中

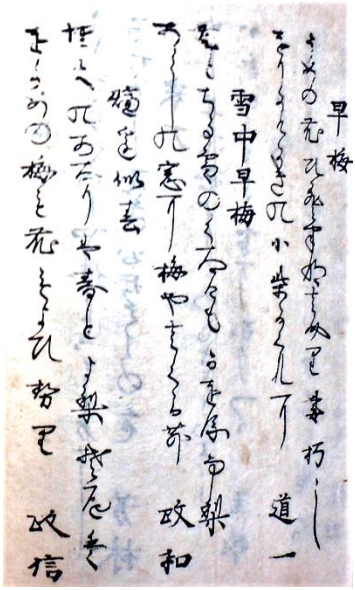
雪かきつめていざや佛を作らまし
　雪おもしろき大寺の庭　　芳　林

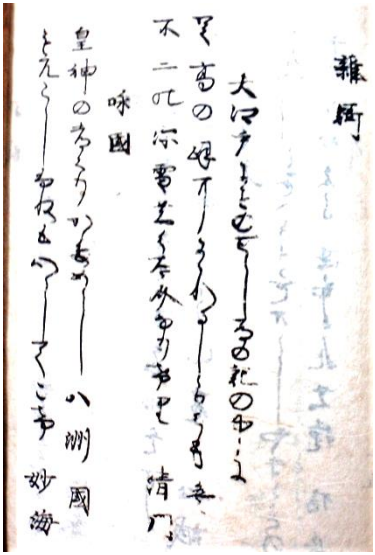
寒　雁

八千草の花すり衣きて
　なれし雁の翼も雪になりつゝ　　孟　雅

寒　夜

雪に伏す竹の籬も此頃の
　寒き一夜を距てましかば　　信　照





早　梅

うめの花一花咲けり妻朽ちし　　道一
　折竹垣の小柴がくれに

雪中早梅

花と散る雪の砕けも香るなり　　政和
　嵐の窓は梅や咲くらむ

焼遽似春

埋火のあたりは春とよりそへば　　政信
　小瓶の梅も花もよひせり

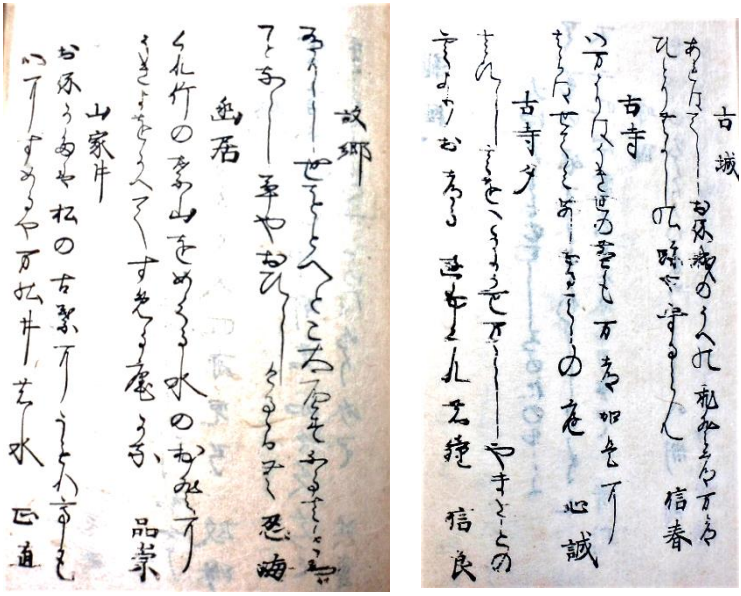
雑　歌

大江戸にもおせし道の記の中に

足高の峰にかゝれる白雲は　　清門
　不二の深雪の砕けなりけり

咏　國

皇神の作りかためし八洲國　　妙海
　唐土船も心して漕げ



古　城

荒れ果てし大城の上の一つ松
　濁り昔の跡や守るらむ　　信春

古　寺

今よりは浮世の塵も松風に
　拂はせてみむ古寺の庭　　心誠

古寺夕

寂しさをいかにかせまし山里の
　雲より落つる夕暮の鐘　　信良

故　郷

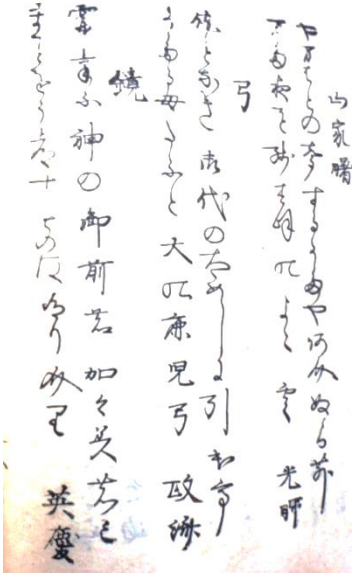
ありし世を問へど答へず故郷は
　ことなし草や生ひ茂るらむ　　忍海

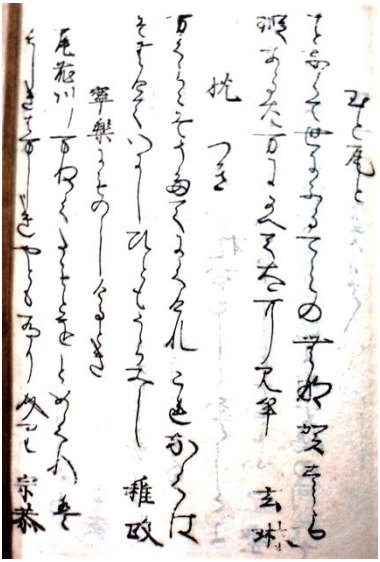
幽　居

呉竹の葉山をめぐる水の音に
　うき世をかへてすめる庵かな　　品崇

山家井

大方は松の古葉に埋れても
　心にすめる山の井の水　　正直





山家曙

山鳩の聲する方や明けぬらむ
　まだ夜を殘す峠の横雲　光輝

弓

仇もなき御代のためしに
　引出でて語るも尊と天の鹿兒弓　政濟

鏡

霊幸ふ神の御前の鏡のみ
　まことを寫すものはありけり　英慶

玉と瓦を

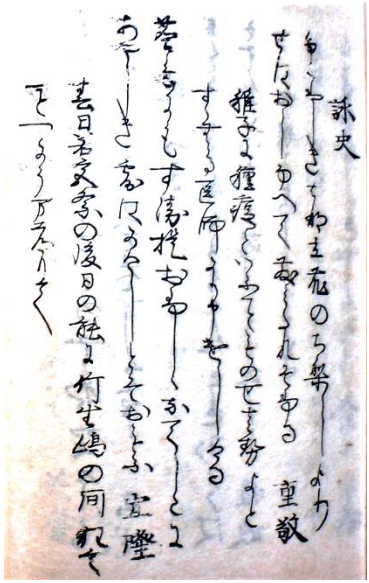
ことなくて世にふる寺のむな瓦
　瑕ある玉に代へてだに見む　玄琳

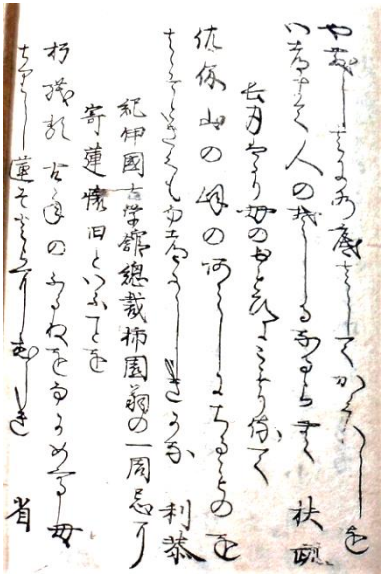
枕つき

枕こそうたてにくけれこれなくば
　そむけて去にし人も怨みじ　稚政

寧楽にものしけるとき

尾花川招く袂をとめくれば
　けしきばましき宿もありけり　宗恭





詠　史

かぐはしき花立花の散りしより
　世はおしなべて五月雨ぞ降る　重敬

稚子に種痘といふことものせさせよと
すゝむる醫師に申し遣しける

塵だにも据ゑで生ふしゝなでしこに
　あやしき露はかけじとぞ思ふ　宣隆

春日若宮家の後日の能に竹生島の狂言を
つかうまつりて

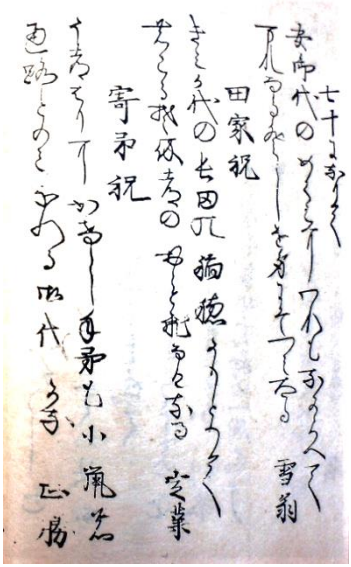
やさしさに水底さして隠れしを
　いつまで人のそしるなるらむ　扶疏

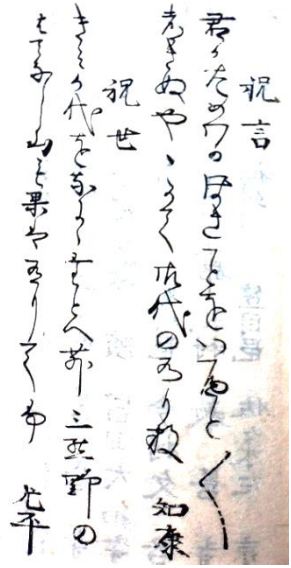
長月ばかり母のおもひに籠り

佐保山の峰の嵐に散るものを
　はゝそと聞くもなつかしきかな　利恭

紀伊國古學館總裁柿園翁の一周忌に
寄蓮懐舊といふことを

朽ち殘る去年の古根を眺めても
　散りし蓮でさらに悲しき　省





七十になりて

安御代の恵みに我もながらへて
　稀なる年を身にぞ積みたる　　雪翁

田家祝

君が代の長田の稲穂刈りとりて
　殘るそはつの思なげなる　　定業

寄矛祝

うつばかりにかけし手矛も小鼠の
　通路とのみなれる御代かな　　正勝

祝　言

君が爲わが壽言を言へどいへど
　盡きぬややがて御代の有り數　　知康

祝　世

君が代を何に譬へむ三熊野の
　果なし山も果は有りてふ　　光平

作者姓名

讀人不知　和州
卓遊浪速　斑鳩里
義禮南都　薩摩掘
大照河州　多門
光美和州　春日大宮權現
宗博同　臺ケ塚
唯淨摂州　川邊郡　北村
信重和州　安堵邑
爲門河州　笠目邑
行湛摂州　柏原邑
信清河州　池田
鳳岳同　志紀郡林邑
有益三州　西尾
宗訓和州　櫟本
等啓南都　柏原邑
爲基河州
安定同
信美河州

某御所
祝松殿
西山信次良
善念寺
富田大和守
今村文吾
敎善寺
佐々木左京
三田助次郎
託明寺
西岡龜四郎
尊光寺
西邑寅三
中邑須三
柳生荘三
三田七左衛門
岩井辰五郎
西岡己一郎

逸雄南都
卓嚴河州
文英南都
宗達和州
美鄉同
保敎河州
孝友和州
桑樹尼同
義秀摂州
徳苗南都
明政和州
貞輝同
眞幸大坂
常方尾州
宗甫河州
幸治和州
信房河州
法忍和州

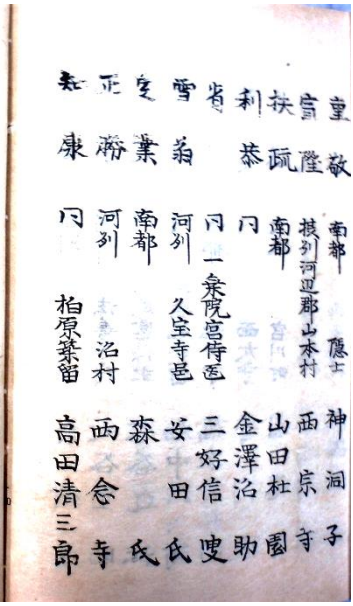
驛長瀧野吉兵衛
久寶寺近松殿
興福寺華嚴院
安堵村小坂梅三郎
中宮寺宮臣小山繁
法善寺村田中兵左衛門
安堵村遠山總三
西安堵村觀音堂
豊嶋郡　野畑村報恩寺
興福院殿
中宮寺宮　近臣上嶋縫殿
安堵村貞二郎
嶋ノ内八幡筋清水英次
愛智郡大高村伊藤平輔
志紀郡大井村松尾氏
法隆寺村上嶋氏内
八尾西岡長右衛門
中宮寺宮侍尼

定光　和州　侍尼
きぬ子　同　安堵村　今邑宗博妻
照峰　河州　久寶寺　大圓寺
宗則　南都　漢國宮神主　宮司靱負
郁城　州　鹿背山　三浦氏
正頼　河州　近松殿侍醫　吉川賢三
至曉　藝州　高田郡豊嶋邑　正善寺二男
宗雄　今村宗博男　今邑棄吉
隆觀　河州　久寶寺　正誓寺舎弟
春淵　南都　芃芝　新平作
富道　同　雲井坂　井上内匠
呉郷　摂州　池田弘誓寺
玄珠　同　稲村教學寺
義和　南都　山村御所臣　仙石右兵衛
光清　河州　柏原村　樫木荘右衛門
義局　同　國分村　竹山新七
景平　同　丹南郡河原城村　大谷七九郎
徹照　大坂　薩摩掘　教詮寺
法英　和州　中宮位宮　侍尼
義簾　河州　國分村　西尾欽之介

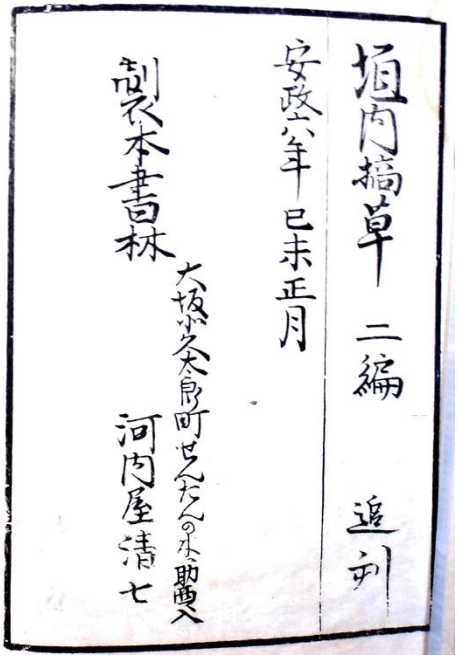
文治　同　近松殿近侍　村上文治
祐忠　大坂　祝松殿近侍　斎藤金吾
信政　河州　八尾　西岡寅次郎
政孝　南都　橋本喜久右衛門
大眞　撮州　豊嶋郡牧落村　安養寺
勝　御室御所　臣　橿村早太
瑞穂　河州　久寶寺邑　吉田又兵衛
祥満　和州　椎木邑　何寺
重光　同　笠目邑　佐々木左司馬
浩然　大坂　薩摩掘　教恩寺
寛海　南都　佐保山　眉間寺
たかとみ　和州　法隆寺邑　松岡宮之輔
直静　同　中宮寺宮臣　奥田亘
芳林　伴林光平男
孟雅　大坂　祝松殿近侍　大河原宮内
信照　佐々木信重　門人　清水照齋
道一　京師入　畫師　斎藤氏
政和　南都　橋本平三
政信　同　般若寺　古川徳太郎
清門　同　鍋屋町　松宮宇右衛門

妙海　和州　法隆寺　普門院
信春　同　笠目村　佐々木右門
心誠　同　中宮寺宮　侍尼
信良　同　笠目村　佐々木良逞
忍海　和州　初瀬住　桑樹庵
品崇　河州　法善寺村　大谷重助
正直　同　高尾宮神主　大谷近江
光輝　同　柏原邑築留　畑中六兵衛
政濟　南都　池ノ丁　橋本丈右衛門
英慶　同　西大寺　普門院
玄琳　大坂　宮川町　圓德寺
稚正　和州　中宮寺宮家士　上嶋掃部
宗恭　同　西安堵村　大西瀧三
重敬　南都　隱士　神洞子
宣隆　撮州　河邊郡　山本村　西宗寺
扶疏　南都　山田杜園
利恭　同　金澤治助
省　同　一乘院宮侍以臀　三好信叟
雪翁　河州　久寶寺邑　安田氏

定業　南都　森氏
正勝　河州　治村西念寺
知康　同　柏原築留　高田清三郎
光平　河州　志紀郡林邑産　伴林氏



光平　河州志紀郡林邑産　伴林氏



佐佐木信綱著『伴林光平全集』「第四詞藻編」
（昭和十九年一月十五日初版）株式会社 湯川弘文社

垣内摘草　二編　追刊

安政六年己未正月

大坂北久太郎町せんたんの木筋西入

製本書林　河内屋清七

あとがき

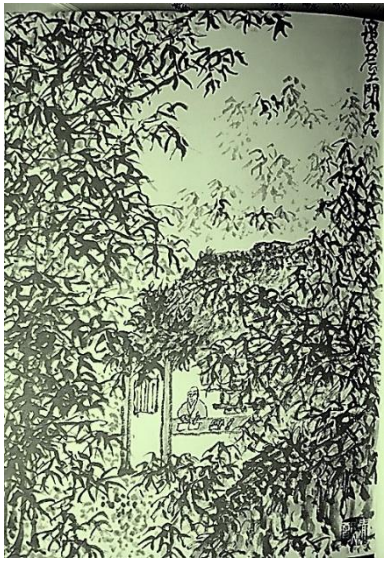
「垣内摘草」を『伴林光平全集』で目にしたとき、光平翁の交友関係のわかるのによいので、データ化した。

そして、平成24年11月に、「伴林光平と西岡家のこと」にまとめる際、池田市立歴史民俗資料館が『垣内摘草』の現物を所蔵していることがわかり、コピーを撮らせもらった。それらをもとに、光平翁の人柄を知る上で参考になればと、自筆の書と読み文を並べてみようと試みる。

ところが、欠落しているところがあり、補充するために中之島図書館が所蔵する『垣内摘草』をみせてもらうことにする。

歌詩は、鈴木純孝様にお願いし、詠んで頂きました。

鈴木様は、令和二年二月、お亡くなりになりました。

謹んで、お悔やみ申し上げます。合奏

令和六年二月　　二保泰士